

# 個性的存在の研究

——特に芸術創造を主体とする個性に就いて——

板垣鷹穂

この稿は、他の仕事の間につづけて来た考察の概要である。課題それ自体が「理念」の如きものであるから、ここには中間報告を兼ね、「思索の素描」を記しておく。

## 1

更めて断るまでもなく、ここに「個性」と云うのは、古くは Leibniz が Discours de métaphysique の中で説いている substance individuelle の如きものを意味する。歴史のつづく限り二度とは現れることのない一回限りの存在であり、複雑・微妙な構造のうちに、「各自の仕方宇宙を反映する」ものである。歴史も風土も社会も家族も、共存の「時代」も個人の「肉体」も、それら一切を含めて、各自個有の様相をもつ。生と死とに区劃される「有限」な時間的存在の中に、「無限」な理念を体現するのであるが、その「体現」の仕方に関りない段階と様相とがある。各個人の個人は各自の制約内で「自由」に生きる。このことにより、一般的に云えば広義の「倫理的価値」を、芸術家に限る場合には「芸術的価値」を、独自の程度と様相とに体現しながら、各自の「構造」に従つて世界と聯関する存在である。

かかる意味の「個性」に就いては哲学の思索が前提されるが、特に「生命哲学」と「哲学的人間学」と「歴史哲学」とが、各自の立場から一般問題として扱つている。また或る程度まで、現代のいわゆる「実存哲学」にも聯関する。然し個性自体の探究としては、恐らく「伝記の哲学」が独自に成立するであろう。更に「歴

史学」が個人を史的展開の中に組みこみ、或は時代的・社会的聯関のうちに考察する場合にも、個性の構造は重要な問題となる。Dilthey のいわゆる「歴史的社会的実在の結び目」をなすからである。

ところで人間の生命体験は、かつて Bergson が Essai sur les données immédiates de la conscience の中で述べた如く、複雑微妙な構造をもつてダイナミックに展開する「連続」である。生と死とに限られた時間的経過の中に、一定の時間的序列をもつ存在ではない、「過去」は「現在」から切りはなされて時間的に位置づけられているのではなく、「記憶」は常に成長し変相しながら生きつづけている。この生命体験の「実相」自体を反省することは不可能である。「反省」は既に新しい「伸展」だからである。ましてこれを「言葉」によつて叙述することは出来ないであろう。Dilthey の云う「理解」は既に「再建」である。Leben erfasst hier Leben は Nacherleben する者の生命体験それ自体である。理解は一種の「創造」であると共に「認識の限界」を予想する。そして、理解者の生命体験の深さと豊かさにより、「伝記」の価値を決定する方法論上の問題が生じるのである。これを否定する場合には、恰も J. P. Sartre の小説 La nausée に於ける伝記者の如き破滅に陥るであろう。Je n'écris plus mon livre sur Rollebon; c'est fini, je ne peux plus l'écrire.

Qu' est-ce que je vais faire de ma vis ? (P. 1 2 3 …). 日記態に書かれたこの作品の「月曜」では、ロルボンの伝記を志しながら、根本史料によつてもこの人物を再現することが出来ないことを感じて仕事を放棄し、自分自身の存在意義をも見失っている。もとより彼は、自己の過去と現在とを結ぶ生命体験の統一性を失った人間であるから、これによつて「認識」の業績一般を否定することにはならない。伝記の筆者は「認識する個性」の限界内で価値の程度に無限の差異を示し、しばしば厳粛な「業績」を完成し得るものである。

殊に「芸術的個性」の構造に於いては、理念の無限性を人間存在の有限性によつて体现する様相も限りなく多様であり、歴史と社会と、時代と環境と、肉体的制約と経済的条件と、個人的影響関係と芸術各自の特質と、その他一切の事情が「体験と創造」の複雑な聯関を形成している。従つて、「個性」としては特に典型的である。そして、各種の芸術部門につき各個の個性的存在を探究した優秀な業績を多く見出すのである。また、「個性の探究」に関して哲学的思索から具体的理解までを、生涯のうちに追求しつづけた Dilthey の如き碩学も存在するのである。且つ、一個の個性的存在を「伝記」にまとめることすら、既に人類の協力事業であり、そのうちに歴史的伸展を内包しているのである。

以上の如き性格をもつ芸術的個性を研究課題に求めるとき、考察の観点を三種に大別することが可能であろう。即ち

- a 個性的存在に関する哲学的思索
- b 個性を認識する方法論的考察
- c 芸術的個性の具体的研究

がこれである。但しこれら三種の立場は、相互に關聯

し融合するものであるから、各自を別個に切りはなすことは出来ない。哲学的思索は豊かな具体的考察を予想せざる限り、単に抽象的な思索に終るから、芸術的個性の多様性を内包することは出来ないであろう。また方法論的考察は、哲学的基礎と具体的研究とを前提してはじめて価値をもつであろう。更に、一定の存在を史料にもとづき「個性」として追求しゆく場合にも、思索的な深さなくしては優れた「理解」に到達し得ないであろう。

かくして芸術的個性の研究は、それ自体が「理念」の如き性質をもつわけである。

## 2

かつての歴史哲学は、歴史の時間的経過の中に「人間性」の価値理念が発現するという一種の信仰にもとづき、「歴史」の意味をここに見出し、或はまた、段階的な「発展」の様相を認めようとした。然しこの通念なるものは、これを倫理的価値に就いて云えば「空しき希求」にすぎない。歴史と共に進歩するものは唯「技術」だけであり、「人間」それ自体には倫理性の向上がないのである。従つて、不断に進歩する技術は、如何なる「手段」にも利用されるであろう。かつて Max Scheler は、その小冊 Mensch und Geschichte に於いて Anthropologie と Historik との関係をのべ、jede Geschichtslehre hat in einer bestimmten Art von Anthropologie ihren Grund, gleichgültig, ob sie dem Historiker, Soziologen oder Geschichtsphilosophen bewusst und bekannt ist oder nicht (p. 15) と云っている。そして、人間観に関する五種の Grundidee を指摘しているが、このうち第4種の

人間観は、第一次大戦後に様々の専門部門から相互に  
関聯なく現われたもので、人間の優越性を予定する伝  
統的観念の正反対である。ところが、第二次大戦とそ  
の以後の時代とに於いては、「技術の進歩」により「技  
術の悪用」が更に尖鋭化しているから、極めて切実な  
思考が現われている。Georges Gusdorf は、その著  
Traité de l'existence morale のはじめに Les trans-  
formations matérielles ont profondément modifié la  
condition de l'homme moderne を説き、Ici s'affirme  
le paradoxe que ce monde de plus en plus puissant,  
de plus en plus riche, soit en même temps un  
monde où la vie paraît de moins en moins sûre,  
de plus en plus menacée (p. 14) を指摘している。  
つづいて、Le monde moderne qui semblait exprimer  
la réussite de l'homme savant et ingénieur consacre  
en réalité sa faillite et lui refuse le plus précieux  
des biens celui sans lequel les autres ne comptent  
pas : la paix (p. 16) と述べている。例えば原子力の  
研究の如き、c'est pour le diable que l'humanité a  
travaillé (p. 19) であろう。19世紀の末には「技術の進  
歩」が信賴されて、課題の解決は世界の幸福をもたら  
す——と云う optimisme であつたものが、現在では  
pessimisme に變つている。そればかりではない。社会  
の日常生活に於いても「技術の支配」は人間の主体性を  
否定する。Ainsi l'homme moderne veut s'échapper  
à soi-même. Mais le paradoxe est que dans son  
effort pour échapper à la hantise de la civilisation  
mécanicienne qui l'a privé de sa vie et de sa paix,  
il retombe sous l'emprise de cette même technique  
inhumaine, qui vient une seconde fois s'imposer à  
lui pour l'aliéner définitivement. Cinéma, journaux,

radio visent à remplacer sa pensée par une pensée  
préfabriquée, une vérité de série (p. 20-1). かくて  
人間社会が「全体として」歴史と共に向上すると云う  
思想は、単なる希望的信仰にすぎず、決して現実の  
「実相」ではあり得ない。

また、芸術の歴史に就いて審美価値の伸展を考える  
ことは、「愚かしき迷妄」と云えるであろう。芸術史は  
優れた時代を豊かにもつが、前進的な伸展は認められ  
ない。むしろ、Simmel のいわゆる Tragödie der  
Kultur の現象が漸次に鮮明となり、「文化の課題」を  
専門化しながら「生命の基盤」から離れる状態である。  
まして、人類史一般に過去の歴史哲学が予想したよう  
な「発達」の観念は、「史実」を無視することの甚しき  
ものと云わざるを得ない。芸術の「性格」は必然的に  
展開しゆくが、それ自体が「価値」の向上ではない。

「歴史」は、古くから一般に想像されていたように、  
いつかは「自然」の変化に伴う人類の死滅によつて終  
るであろう。或はまた現在恐れられているように、発  
達した「技術」を誤用して、自らを死滅に導く結果に  
終るかも知れない。人間の「本源悪」は「支配慾」を  
徹底させることにより、自らを亡ぼす必然性をもつ  
ているかも知れない。いずれにしても、歴史的展開の  
「一回性」は「偶然」を「必然」にかえながら、予想  
も希望も約束もない独自の伸展を継続しゆくものであ  
り、かかる意味で吾々は、歴史を信じる事が出来な  
い——と云えるであろう。

これに対し、歴史上に存在し歴史を構成する「個性」  
は、それ自体の有限的存在の中に「完成」をもつもの  
である。Louis Lavelle がその著 La conscience de  
soi の中で美しく述べているように、「死」の深い意味  
がここにある。Car la vie est un moule qu'il nous

appartient de remplir; mais nous ne savons pas quelle est sa grandeur. Celui qui mène à bien la tâche de chaque jour doit toujours s'attendre à voir le moule se briser et la statue apparaître. Celui qui redoute la mort veut garder éternellement un moule où il n'a rien su mettre: il ne veut point voir la statue sortir (p. 203-4). 若し人の墓に碑文を書くとするれば、これほど美しく適当な言葉はないであろう。ここに「有限」な存在である個性の「永遠性」が認められるからである。Nous honorons les morts parce que leur vie, désormais fixée, est entrée dans le cercle des réalités éternelles (p. 206). 「歴史」を信じ得ない人類の宿命も「個性」に永遠の存在を確認することが出来るのである。これは観念論ではない。現実自体の問題である。

### 3

無限の段階と様相とに於いて理念を体現する個性の「一回性」は、生と死とに限られた有限的存在であり、肉体存続の制約内にあるから、時計によつて計量される——云わば客観的に計ることの出来る——「時間」をもち、年代記的な時間経過を前提する。然しながら、人間の生命体験に於ける時間は Bergson の否定する「空間化された時間」ではない。従つて、「年代記の時間」と「生命体験の時間」とが個性の構造を規定することになるが、肉体的生命の時間的量は、決して、個性的存在の体験価値と同一ではない。両者の関係は個性の構造自体に規定されて、無限の様相をなすのである。

個性的存在の「有限性」は、例えば芸術家の生涯に

於いては、芸術理念の「無限性」を体現する「限界」として考えられる。個人の制約内に於いて「自由」に生きる様相として反省される。そして、その「制約」自体が個人を歴史上唯一の存在たらしめ、「個性」を形成させるのである。吾々は、芸術史上に回顧されるあらゆる芸術家に就いて、その精神的・肉体的・社会的・経済的・時代的・風土的、その他一切の制約が彼等を「彼自身」たらしめた様相を知っている。その制約の一つを変えることすら、既に彼等を別異の個性に化し去るのである。然し人間一般に於いては、肉体的生命を有限たらしめる「死」の問題が重要な解決を求める。既に Simmel は、その著 *Lebensanschauung* (Vier metaphysische Kapitel) の中に *Tod und Unsterblichkeit* の一編を組み、*In Wirklichkeit ist der Tod von vornherein und von innen her dem Leben verbunden* (p. 97) と述べ、個性の「完成」に言及しているのである。

現代では、いわゆる「実存哲学」も死の問題を重く扱っているようであるが、その考えかたは、積極的な「個性の完成」ではなく、むしろ消極的な「必然的制約」と云えるであろう。この系統の——主としてドイツ哲学——を手際よく要約した O. F. Bollnow の著書 *Existenzphilosophie* (1955) は、「死」に就いて下の如く述べている。Die Endlichkeit des menschlichen Daseins, wie sie sich in der Geworfenheit in eine bestimmte Situation und insbesondere in der Überantwortung an die Erfahrungen der Grenzsituation auswirkte, musste notwendig auch den Tod als die letzte und äusserste Grenze des menschlichen Daseins eindringlich hervortreten lassen. Und die Befindlichkeit der Angst, in der sich der Mensch vor

das Nichts gestellt und so zu einem eigentlichen Seinkönnen aufgerufen findet, musste auch ihrerseits zur äussersten Angst des Menschen im Verhältnis zum Tod hinüberführen. So musste aus einer inneren Notwendigkeit heraus der Tod für die Existenzphilosophie als die äusserste, die Schärfe des Daseins in ihrer letzten Unausweichlichkeit bedingende Tatsache in den bestimmenden Mittelpunkt der Auffassung vom Menschen treten (p. 75). Bollnow は更に「死」の意味に就き、Der Tod zwingt vor allem das Leben in seine äusserste Ungeborgenheit hinein. Erst dadurch macht er es frei für die Aufgaben seiner eigentlichen Existenz (p. 102)であることを指摘している。但し全体として、いわゆる「実存哲学」は、「生涯」の生命体験に於ける伸展を積極的に扱っていないようであるから、「個性」そのものの具象的実相を考察する立場には関係がない。

これに対し Lavelle が上記の書に説く「死」の意味は、個性を真の「個性」たらしめる核心を示唆している。La mort de quelqu'un donne toujours accès dans l'univers spirituel à une forme d'existence unique et impérissable : il n'est désormais au pouvoir de personne de l'anéantir. Tant que les individus mêlaient leur vie l'une à l'autre, tant qu'ils agissaient les uns sur les autres, il était difficile de reconnaître ce qui appartenait en propre à chacun d'eux. Maintenant la séparation s'est faite. La mort dégage les êtres de cette sorte de communauté naturelle où la vie les retenait, pour créer en eux l'indépendance personnelle, grâce à ce

parfait détachement qu'elle produit à l'égard de tout ce qui leur est extérieur et auquel, par leurs seules forces, il ne seraient point parvenus (p. 214). 更にこのことから、个性的実在の意味にみちびかれる。Cette vie qui jusque-là n'avait de sens que pour nous vient prendre place dans l'univers comme le tableau qui se détache enfin de la main du peintre pour prendre place dans le patrimoine de l'humanité. Seulement, à la mort, le tableau que laisse chaque homme et auquel il a consacré sa vie tout entière c'est lui-même (p. 216).

現代の哲学者の中で、「个性的存在」一般の問題を最も総合的に深く追求しているのは Georges Gusdorf であるが、その思索は、「芸術的個性」の研究にも極めて豊かな示唆を与えている。上に引用した *Traité de l'existence morale* (1949) に先立つ1年、当面の問題にとり特に重要な大著 *La découverte de soi* (1948) を発表し、その後には、*Mémoire et personne 2 vol* (1951) を刊行している。前者は個人的自我を探究するにあたり、内的反省の態度を緒に求める。そして、これを批判しながら問題を漸次に展開させ、間接に個人性を追求する立場に移行し、更に個性の構造から人間実存の倫理的意味にまで、思索を連続的に伸展させてゆくのである。全巻を通じ微妙に連続する思索の展開でありながら、歴代の日記・追想、心理学と精神病学との諸説、文芸家・美術家の体験、哲学者の思想、その他を適確に織りこみ、極めて具体的に探究を進めているのである。このうちには、種々の芸術を例にとっている場合も多いが、むしろ、500頁をこえる大著全体が、芸術的個性の研究に前提される基本的思索とみなさるべきものである。日本では、「割り切れた理

論」や「要約され得る学説」を偏重する傾向が認められるが、この著書の傑出している点は当にその反対である。全巻を通じて「活きた個性」をその複雑微妙な構造に於いて扱い、豊富な具体性をもち、而かも一貫した思索に伸展させているところにある。且つ、芸術史の専門家が根本史料に即し詳細な「理解」をすすめ、或は、美学の立場から厳密に「理論」をくみだるととき、その背後に予想される基本問題を提供しているところにある。また、芸術史上の個人を研究する者が漠然と前提している諸問題に就いても、深い反省の示唆を与える。例えば、個性の形成過程を考察する場合、普通には「影響」と言う言葉で扱われている対人関係の如き、もしくは、「時代」とか「性格」とか云う観念で規定されているものの如き、本来は更に深い追求を要する問題である。そのほか、「写真」の概念で片付けられているようなものも、個性的体験によつて無限の段階と様相をとる筈であるから、ここにも「個性的存在」の構造に関する思索が前提されている。この書は、それらの基礎となる「自我」の探究である。(この著書に聯関する諸問題に就いては、後にも指摘する機会がある)。これにつぐ著 *Mémoire et personne* は、「現在」と云うものの意味を具体的に追求することから出発して、「記憶」と「忘却」の問題を伸展させ、「過去」の意味から人間実存の思索にみちびいている。二巻の大著を通じ、日常些細な経験から哲学的実体論までの課題を含み、文芸作品から精神学説までの察察を組みこみながら、而かも一貫した目標を失うことなく、具体的に且つ総合的に思索を進めている。個性的実体のダイナミックな構造が芸術的創造を複雑微妙に規定するから、「記憶」の探究は芸術的個性の研究に深い意味をもっている。

かかる事情から Gusdorf の著書は、「芸術的個性」の研究につき現代哲学の業績中で特に注目に価する。そしてそれと共に、この種の具体的で総合的で而かも一貫した追求が、基本的な必要条件であることを示唆している。

#### 4

個性に関する学的考察は、認識の限界内に於いてこれを把握し、その「本質的体現」を *Nacherleben* しつつ個性的に「理解」し、その独自性を「表現」することである。個性本来の「実相」そのものを理解し表現することは不可能であり、学的理念にはかならないが、それゆえに、理解が深ければ深いほど「個性」は鮮明度を増し、その生命価値は豊かさを加えるのである。この場合、「認識の限界」は認識主観により個性的に規定される。即ち、認識する者自体が個性としての有限性をもつから、認識者の理解の深さと体験の豊かさが前提されている。一人の芸術家の個性を追想することが既に個性的な「体現」であり、同時に、歴史的遺産を新たに伸展させることである。従つて、一個性の探究すら人類の協力事業となるのである。但し、個性認識の問題は学的研究の範囲にとどまらない。吾々の日常生活に於いても一般に認められる。そして、個性表現の課題は、芸術的創造に於いては特に重要である。

然し、ここに注意すべきは、「個性化」と「類型化」との複雑な関係が成立することである。どこまでも「個性」の把握と表現とが主目標ではあるが、同時に「類型」に対する思考が随伴する。そして、それと共に、Max Weber の説く *Idealtypus* が個性的認識の

「手段」として基本条件となる。

日常社会の経験に於いて吾々が「人を知る」と云うとき、次第に深まりゆく理解の過程を反省するとすれば、個性化された把握と類型化された思考との錯交を見出すであろう。そしてその間に、その「人」の全体を漠然と秩序だてた一種の観念が形成され、それをその人の個人性に即して漸次に修正してゆく。はじめには唯だ Persona (面)をつけた社会(舞台)の存在としてみえたものが、次第にその人個人の独自性を示して来る。また、その人の死後に吾々の追憶の中では、個性的本質が統一した形態をとつて純化する。類型的な観察から個性的理解に移行し、更に、追憶の「選択」にもとづく「再建」にみちびかれるのである。

芸術に於ける個性の「理解と表現」が、種々の様相をもつことは云うまでもない。演劇界に傑出した業績を残している Stanislavskii は、類型的な演技を否定して「持役に生きる」ことを俳優に求めた。そして、極めて基本的で組織的な訓練を行つたのである。而かもこの基本訓練は、肉体の柔軟性から精神の想像力に及ぶもので、舞台に立つあいだ役柄の個性的情況になり切ることを要求する。演技者を媒体として「理解」が「表現」に移行する場合の典型である。また、美術史上に傑出している肖像画家の作品は、直観的に把握された個性表現の一種である。Simmel はその著 Goethe の中で、「深く人を知つた」典型として、Goethe と共に Velasquez をあげている。歴代哲学者のうちで最も肖像画に関心をよせていた Simmel は、生命哲学や歴史哲学に関する著書の中で *Portrait* に例を求めているが、Rembrandt を扱つた書中では、肖像に於ける精神の不可視性を可視的に描出する問題を、理論的に解決しようと試みているし、別の小論には *Das*

*Problem des Porträts* がある。この思索家は、豊かな具体的示例を的確に扱つているが、Velasquez に対する意向も至当である。然し、個性表現の課題が特に深く追求される芸術は、断るまでもなく文芸である。

文芸作品の中で「個性と類型」の関係を良く表示している典型は Flaubert の *Madame Bovary* である。文豪がこの創作を意図したときには、Emma と云う一人の女性によつて「普遍性」を扱うことであつたろう。作者自身の影像 (*Madame Bovary, c'est moi*) であると共に、多くのフランスの村に悩む女性 (... *a vécu, souffert et pleuré dans cent villages de France*) である。空想の世界を現実と混同して躡く人間のタイプを描くことであつたろう。ところで、作者がモデルとしてえらんだのは、彼の家庭に知られた実話の人達である。村医 Eugène Delamare の妻 Delphine Couturier が Emma 原型である。Flaubert に関する優れた評伝の筆者 René Dumesnil が詳しく述べているように、現実に存在した一女性の「個人性」から示唆を得て、普遍的な「人間性」の一樣相を表現したのである。然し、文芸作品 *Madame Bovary* それ自体は、この夫人を「個性」として追求し描出することにより、傑出した「芸術価値」をもつのである。心理の動きから言葉使ひまで、自然の環境から対人関係まで、それらを個性的に統一した *portrait* の範例であり、唯だ一人しか存在しない個人性の表現である。Flaubert は「名文家中の名文家」であり、簡結な文章は音読しても極めて快いが、決して彼は単なるスタイリストではない。また彼は、創作にあたつて資料の探究に専心するが、決して唯だのリアリストではない。えらばれぬいた言葉が個性表現の的確な手段であり、描写の形態が作中心物の主観と一致している。

Dilthey は作家が作中の人物に同化している例として、Goethe, Turgenew, Balzac 等をあげている中に、Flaubert に就いても述べている。Emma が服毒するくだりを書きながら、作者自身が消化器の障害を生じたと云うのである。これも *Nacherleben* の如きものであるが、彼の文章は「個性化的表現」の範例である。しかるに、この傑作が社会に普及するとき、一般の通念で考えられている *Bovary* 夫人は既に独自の「個性」ではなく、*Bovarysme* の「類型」に変化するのである。

Dilthey はその優れた論考 *Beiträge zum Studium der Individualität* のうち、*Die Kunst als erste Darstellung der menschlich-geschichtlichen Welt in ihrer Individuation* の章で、文芸と科学との史的関連を考察し、Schiller の *Wallenstein* に言及している。(当面の課題にとり注目を要するので、以下に概略を記しておく)。

人間的歴史的現実を深く理解する能力は、生命体験と描写芸術と科学考察との密接な関連のうちに育成され発展するものである。Auf dem Grunde dieses Zusammenhangs, in welchem wir die darstellende Kunst fanden, betrachten wir sie nun als das Organ, welches die menschlich-geschichtliche Welt und deren Individuation der Menschheit zum Verständnis bringt (G. W. Bd. V. p. 275) 然し、人間的歴史的現実を把握し表現するために、性格的な事象を凝集させ強調しながら典型を構成する操作は、描写芸術と歴史科学とに共通な特質である。両者とも、その属する時代に個有な生命体験を基礎とする「理解の深さ」を予想するから、歴史科学も描写芸術と等しく、或る程度の主観性から離れ

ることは出来ない。それだけにまた、精神史上に傑出している時代は、人間的歴史的現実を把握し描出する理解力も深く、これを基礎とする芸術と科学との歴史上に、劃期的な意義を有する幾多の業績を残している。このゆえに、古典時代から19世紀 *Idealismus* の発展期まで、個性の典型を透して、人間的歴史的現実を理解する能力が深まりゆく過程をたどり得るのである。18世紀から19世紀に至る時代は、17世紀に於ける自然科学の基本的展開を継承して、人類の民族性、地域の特殊性、経済機構の制約、等の複雑な環境条件のもとに、人間的歴史的現実の個性を理解する新しい方法を創造しているから、この時代には三種の芸術形態が成立する。其一は、一個人の伸展史を環境の中に於いて扱うものであり、其二は、作者のぞくする社会を描出する形態であるが、其三は、歴史的な性格と運命とを「歴史的制約の関連」に就いて把握するのである。これら三種の芸術形態には、いずれも科学的思考が対応する。即ち、伝記的叙述と社会学説と近代歴史学とがこれである。そして、歴史劇として最も典型的な作品が Schiller の *Wallenstein* である。この三部作は、真実に徹し歴史的把握に深く、歴史的諸条件をつくしている。作者は *Wallenstein* を一個の歴史的な性格として創造し、歴史的必然性を厳密に追求しながら、この人物の運命を正しい歴史的な理解のもとに描出している。Schiller は30年戦争期のドイツに現れた大人物につき、その歴史的謎を「解決」したが、後の時代の歴史学は本質に於いて、彼のといった謎を「立証」したにとどまる。Schillerこそは「歴史的な性格」を創造した最初の作家であり、歴史的世界を本能的に理解する力と共に、彼の詩的創造力はま



た、個人を超越する歴史的意志の如きものをここに観得した。その史的考察は当時の歴史的構造に聯関するから、歴史劇は必然的に三部の大作となる。そして、Wallenstein にはたらきかける歴史的能動性と、この人物の精神事情にもとづく内的相剋と、彼の没落過程とを厳密に規定し、綿密に追求しているのである。Schiller はこの作品を分析的に展開させているが、歴史的構造を当時の特殊性に即し史料本位にまとめている。それらの史的聯関から、性格に於ける内的過程や運命の推移の因果関係を、厳密にたどつてゆくのである。この作者の如く哲学的思索に優れ歴史的教養に深い精神であつてはじめて、歴史的細部の豊富さを「写實的」に而かも「必然的聯関」に於いて、描出することが可能なのである。

Dithey のこの論文 (1895—6) は、Ideen über eine beschreibende und zergliedernde Psychologie や Die Entstehung der Hermeneutik. 或は未完成の業績 Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften と共に、個性の認識に関する傑出した思索であるが、特にこの碩学の、文芸史に関する豊かな教養を組みこんだ業績であるから、更に興味深いのである。

## 5

特定の個性を「研究対象」として選出し、これを「個性」として学的に考察し表現する一般的な操作に於いては、Max Weber の説く Idealtypus が特に注目されるであろう。碩学の著述の中でこの問題に関係が深いのは、Die “Objektivität” sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis II の一部分 (Gesam-

mmelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre. 1951 年新版 p. 190—208) であるが、Weber はこの論文の中で Idealtypus を種々の観点から述べている。その論旨が断片めくのは決して多議を含むからではない。成立条件の複雑さを具体的に指摘するためであるが、これに關して、歴史的社会的實在の認識に於ける「限界」の問題を深く追求している。追想的に体験する「理解」と価値に關係させる「個性化」とを述べつつ、学的考察の「手段」として Idealtypus の成立を説いている。Idealtypus は歴史的社会的「事実」ではない。また、学的研究の「成果」でもない。云わば、現実の非合理性と多様性とを秩序だてる觀念の形態である。例えば、吾々が Christentum を論じるときにもこれを予想しているが、唯物史觀の如きも一種の Idealtypus である。歴史家が考える「発展」などもこれである。Idealtypus 本来の意義は、歴史的的事実を個性化的に把握する手段であるから、これを事実に照応し、その相異を検討しながら、常にこれを修正しゆくことにより、「個性」の認識を深めるのである。Weber の論旨の大要は、下にえらび出す若干の断片から、総合的に推察されるであろう。……er ist keine “Hypothese”, aber er will der Hypothesenbildung die Richtung weisen. Er ist nicht eine Darstellung des Wirklichen, aber er will der Darstellung eindeutige Ausdrucksmittel verleihen (p. 190). Idealtypus wird gewonnen durch einseitige Steigerung eines oder einiger Gesichtspunkte und durch Zusammenschluss einer Fülle von diffus und diskret, hier mehr, dort weniger, stellenweise gar nicht, vorhandenen Einzelercheinungen, die sich jenen einseitig herausgehobenen Gesichtspunkten fügen, zu einem in sich

einheitlichen Gedanken bilde (p. 191). また Weber は、歴史家がしばしば「学説」と「史実」とを混同することにつき警告し、ここに最も危険なる通弊を指摘している。Nichts aber ist allerdings gefährlicher, als die, naturalistischen Vorurteilen entstammende, Vermischung von Theorie und Geschichte, sei es in der Form, dass man glaubt, in jenen theoretischen Begriffsbildern den "eigentlichen" Gehalt, das "Wesen" der geschichtlichen Wirklichkeit fixiert zu haben, oder dass man sie als ein Prokrustesbett benutzt, in welches die Geschichte hineingezwängt werden soll, oder dass man gar die "Ideen" als eine hinter der Flucht der Erscheinungen stehende "eigentliche" Wirklichkeit, als reale "Kräfte" hypostasiert, die sich in der Geschichte auswirkten (p. 195).

これと同じことは、芸術家の個性を扱うときにも云える。吾々が特定の芸術家を個性研究の対象にえらぶとき、そこには既にその個性の Idealtypus が成立している。そして、研究経過の間に事実と照応しながら修正し、漸次に個性を「個性」として深く理解し、个性的統一を的確に把握するに至る。且つ Weber の説くごとく、Idealtypus はこれを形成する「時代」の思考を反映するから、新しい時代は新しい Idealtypus を形成する。従つて、「永遠に若い科学」として常に伸展する。……es gibt Wissenschaften, denen ewige Jugendlichkeit beschieden ist, und das sind alle historischen Disziplinen, alle die, denen der ewig fortschreitende Fluss der Kultur stets neue Problemstellungen zuführt. Bei ihnen liegt die Vergänglichkeit aller, aber zugleich die Unvermeidlichkeit

immer neuer idealtypischer Konstruktionen im Wesen der Aufgabe (p. 206). 芸術家の個性に関する「厳正」な研究も、これによつて常に発展しつづけるのである。

然し「個性」の理解には、上記の Idealtypus とも異り、また単なる「類型」とも異なる「典型」が加わる。無限の様相と段階とをなす一切の个性的存在の中から、特に典型となるものをえらんで個性自体を鮮明化する操作である。例えば、Goethe と Schiller は相互に深く 聯関して各自の「個性」を形成していると共に、二人は「対比的な典型」であり、対比によつて各自の鮮明度を増すのである。また音楽史家は、Bach と Haendel とを一組の「対比」として扱うのが普通である。Simmel は著書 Rembrandt の中で、Schöpfertum と Gestaltertum とを対比させ、Michelangelo と Raffaello とのコントラストを一例にあげている。この場合はむしろ、個性を形成する「類型的要素」の意味であり、類型の対比と云うよりも「典型的傾向」の如きものである。これら常識的な示例は別として、優れた音楽史家 Alfred Einstein は、その随筆的な著書 Grösse in der Musik の中で、豊富な史料を駆使しながら幾多の「典型的対比」を例にとつている。これらはいずれも、個性を「個性」として把握するための手段であり、安価な「型の分類」を意図するものではない。

なお、芸術的個性の認識には、一般に注目されていない——然し極めて重要な——必要条件が加わる。単に「価値関係」による個性化だけではなく、「価値評価」の問題を扱うことがこれである。即ち、理念の無限性に対して人間は有限な存在であるから、価値を体現する「段階と程度」を判断することが、「個性」の認

識課題となるのである。もとよりこの場合の「価値」は、一定の美学なり芸術論なり倫理学説なりの規定する規範にもとづくものではない。理念体现の「様相」は芸術家の個性により異なるから、個性自体を規定する価値判断でなければならない。云わば、個性に即して個性を超越した判断である。「個性」の価値は、単に「業績」の結果だけではなくして、その「人間全体」の規定するものであるから、芸術史上の「大存在」も人間性の体现には段階の相異を示し、同一個人の中にも価値の高低が区別される。まして、人間の「有限性」には限りない程度と様相とが複雑に錯交しているから、多様な「限度」がその芸術家の個性を形成することになる。これは決して、外部からの価値判断ではなく、個性の構造の「内的必然性」に即した評価である。一般の「伝記」は、価値関係だけを考察して価値批判を欠きやすい。芸術家の研究者がこの条件を厳守している場合は少ないが、A. Einstein の名著 *Mozart, sein Charakter, sein Werk* の如き優れた範例である。

## 6

「伝記」が歴史学的価値をもつ意味につき、生涯を通じて深く追求し、且つ、伝記そのものの綿密な業績を残した最初の代表者は Dilthey であつた。この碩学は晩年の思索 *Der Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften* で「生命」の問題を探究しているが、この続編として意図した稿 *Entwürfe zur Kritik der historischen Vernunft* の中では、「伝記」と「自叙伝」とを特に重く扱っている。歴史的個性に於ける生命体験が、歴史的認識の基礎となるからである。Die Aufgabe des Biographen ist nun, aus

solchen Dokumenten den Wirkungszusammenhang zu verstehen, in welchem ein Individuum von seinem Milieu bestimmt wird und auf dieses reagiert (G. W. B. 7. p. 246). 彼は個人の追憶に die Urzelle der Geschichte を認め、自叙伝と伝記とを媒介する「理解」の問題を考える。Der literarische Ausdruck dieser Besinnung des Individuums über seinen Lebensverlauf ist die Selbstbiographie. Indem aber diese Besinnung über den eigenen Lebensverlauf auf das Verständnis fremden Daseins übertragen wird, entsteht die Biographie als die literarische Form des Verstehens von fremdem Leben (p. 247). 生命自体と歴史とを結ぶ最も本源的な関係がここにあるが、複雑な歴史的聯関を示す historische Persönlichkeiten に Dilthey の注意はむけられることとなる。この考えかたから彼は広義の「自叙伝」を重視する。Die Selbstbiographie ist ein Verstehen seiner selbst であるから、個性的生命体験の過去と現在とを結ぶ複雑な構造関係が「内的理解」をもつことになり、且つ、一貫した統一性をとるのである。この根本思索を「自叙伝」自体の課題として扱い、自叙伝史を業績にまとめつつある専門家は Georg Misch である。彼は *Geschichte der Autobiographie* の第一巻（序論と古代篇）を遙か以前に出版したのち、最近この部分を二巻に拡大し更に中世篇を刊行している。Misch の意見（第一版序論）によれば、Die Relation von Ich und Weltwirklichkeit ist die Grundtatsache des Lebens und alles Verständnisses des Lebens aus ihm selber であり、ihr Wesen ist, dass die Form aus der konkreten erlebten Wirklichkeit einzigartig herauswächst, sodass Individualität und Formgestalt eins

werden. Sie ist wie das Leben weder reine Form noch Stoff für sich であると云うのである。(新版未着につき不明だが、或は序論も訂補されているかと考える)。最近には、Jan Romein (アムステルダム大学教授)が「伝記」に関する概論書(独訳 Die Biographie, Einführung in ihre Geschichte und ihre Problematik 1948)を著したが、単なる「概論」であり、Mischにみるような問題の追求はない。

然し、「個性的実在」と「個性的認識」との間の関係は、Dilthey や Misch の——業績を別として——理論そのものよりも複雑である。この点で注目すべき小著がある。André Maurois がイギリスで行った講演 Aspects de la biographie (1928) である。この書で彼は「伝記」に対する批判的考察を試み、極めて示唆にとんだ意見を述べている。Maurois は英国通であるから、イギリスの伝記書や文芸家の言葉からのみ引用しているが、Carlyle の言葉をもじって Une vie bien écrite est beaucoup plus rare qu'une vie bien employée (p. 259) と云っているように、伝記や自叙伝が「個人」をその「実体」のまま扱い難い事情につき、種々の観点から興味深く述べている。On peut comprendre un fait scientifique par analyse et synthèse ; on ne peut pas comprendre un être humain en épuisant sur lui tous les détails, parce qu'un être humain représente une complexité infinie et, qu'eût-on même des centaines d'années devant soi, on n'épuiserait jamais cette complexité. Il faut comprendre par coup d'Etat (p. 173). この小著全体がエスプリに豊んでいるが、問題の在り方は良くとらえている。「根本資料」に就いても、個人性の「実相」を伝え得ない点を指摘しているが、特に現代

では、過去の時代のような correspondances が得難いことをユーモラスに述べている。La vie la plus romantique se passe aujourd'hui par téléphone. Un Byron et une Caroline Lamb modernes ne laisseraient sans doute aucune trace de leur conflit (P. 257).

Maurois がエスプリで述べていることを、Gusdorf は La découverte de soi (上記) の中で綿密な思索として追求しながら、日記も追憶文も自叙伝も「個人の実相」を示さない事情を詳述し、幾多の例をひいている。結局, Identifier le journal avec la vie personnelle, comme on est parfois tenté de le faire, c'est substituer un moi de papier, sans épaisseur, an moi véritable de chair et de sang (p. 132) である。かくて「生命」を把握する方法論の問題は、Bergson 以来の現代フランス哲学により、新しい批判的基礎を与えられている。

## 7

生命体験に於ける「時間」の問題は、Bergson の思索に最初の代表的解釈を見出すが、現代では特に注目されている。文芸学の方面でも、例えば Richard Thieberger の論考 Der Begriff der Zeit bei Thomas Mann (1952) の如き試みが出ている。Th. Mann は Bergson の著書を読まないそうだが、独自の立場から「時間の二元性」を扱っているようである。「伝記」に於いても「具体的表現」としては当然の解決を要する課題であるが、「理論」自体としては方法論上の一難問であろう。即ち、生命的時間と客観的時間との区別がここに解決を要求するのである。描写技術の立場から

云えば、伝記は年代的序列に従って書かれなければならない、生涯の展開を規定するためにえられた「事実」に即し、年月日を記録してゆく必要がある。その限りでは、客観的に計量される時間を前提することになり、「時間の空間化」が予定されざるを得ない。然し、生命体験の時間は「現在」を主体として過去と未来とを——云わば——ダイナミックに伸展させる「連続」である。そして、伝記が「個性の実相」を出来るだけ表現しようとするれば、この生命体験の時間に近付ける必要がある。この解決は、「体験された生命」と「反省された生涯」との関係として扱うほかないであろう。Bergson は *La vie et l'oeuvre de Ravaisson* に一篇の美しい小伝を残しているが、これは、Ravaisson の地味な活きたを「反省された生涯」として個性的に統一した回想文であり、読者の心に深い感銘を与える追憶であるが、生命体験を「実相」に近く描写したものではない。

以上に示唆した問題を更に延長するとき、「個人」と「歴史」とを聯関させながら区別する観点に移行するであろう。

現代の歴史哲学は、歴史的事実を形成する「個人」の生命体験を探究し、この立場から「歴史」の問題をみちびき出して、歴史的認識に新しい方法論の基礎を与えようと試みている。現代に於ける歴史思想家の一人 Raymond Aron は、*La philosophie critique de l'histoire, essai sur une théorie allemande de l'histoire* に Dilthey, Simmel, Rickert, Weber の四人を扱い優れた論考をまとめているから、歴史哲学に関心の深い学者であるが、*Introduction à la philosophie de l'objectivité historique* (1948) は、前者の如く論旨が明快でないように思われる。然しこの書の中で

生命体験の構造と歴史的認識の在り方とを区別し、*L'histoire appartient à l'ordre non de la vie, mais de l'esprit* (p. 86) と述べているのは、一種の示唆を含む言葉である。然し、既に指摘して来たところから、個人——伝記——歴史の関係を下の如く要約し得るように思われる。即ち、「伝記」の中に「歴史」は反映し、歴史的事実は個性的存在を *Urzelle* として形成されるが、伝記は生命体験の実相と異なる統一的秩序をもっている。また歴史は伝記に対し、異なる原理のもとにその必然性を把握することになるから、個人自体は、かかる「必然性」を構成する要素に変わる。そして、この歴史的必然性は、その一回性に於いて独自の時間的秩序をもつことになる——と考えられるであろう。

但し、問題はなおつづく。「伝記」は個性の生命体験を「反省」した時間的秩序をもつが、有限の存在をこえて永遠の理想に参与することにより、「個性の実存的意味」をもつものと考えられる。伝統的な歴史哲学は、理想の段階的発現を歴史の展開にみようとする *Optimismus* に代表されたが、現代の立場から考えれば、個性的存在が「自由」によつて歴史性を体現する——と云うほかないであろう。そこで、「生命の時間」が歴史に関係して来ることになるが、Eric Dardel の小著 *L'histoire, science du concret* (1946) はこの問題にふれている。即ち、歴史学では「時間」を年譜的序列に扱うのが通念であるが、このままでは、物質的宇宙現象の時間内に歴史を組みこむことである。然し、歴史的時間からみれば宇宙的時間は実のところ *le temps de l'Absence* (p. 52) にすぎず、科学の無視しているところに歴史の本質的課題がある。この考え方から発して現代の哲学に示唆をうけ、生命的時間と歴史的時間とを聯関させている。Le Temps his-

torique n'est pas à chercher originellement dans le passé : l'histrique n'est historique que par rapport à un avenir qui l'attend et se temporalise en entrant dans le présent (p. 73). かくて、現代哲学が重視する「現在」の意味にみちびき「実存」に結びつけて、「時間」から「永遠」に到達させるのである。De l'Instant qui, dans son instantanéité, contient, d'avance, toute l'Histoire. De l'Instant qui, loin d'être „dans le temps”, „transporte” le présent au-dessus de lui-même; …… L'intensité de la vie intérieure fait apparaître le temps sous son vrai jour que cache, d'ordinaire, la médiocrité de l'existence sans histoire. …… l'Être et le Temps se confondent ici. …… l'Événement se confond dans le concret avec l'Existence: …… Le Temps n'est alors que le destin intérieur de l'homme, l'„ espace” ouvert à sa liberté, le „lieu ontologique” où il est appelé à construire pour l'éternité (p. 90).

以上のように、個性の探究に因む現代フランスの思想は、終局の方向に於いて一つの共通性を示すように思われる。即ち、内的省察の具体的な思索にもとづき生命の問題を追求すると共に、「自由」の境地を示唆していることである。この意味から *Les études bergsoniennes I* に掲載された Floris Delattre の論考 *Bergson et Proust* (1948) は興味深い。二人の個人関係をはじめ両者の著述に就いて詳細な比較を試みながら、Bergson が Proust に影響した範囲を限定し、全体としての思想傾向に於ける根本的な相異を指摘している。そして、Bergson の生命発展論が Charles Péguy と Georges Sorel との二人に「実践」への示唆を与え、極端に異なる反映を及ぼした関係に言及して

いる。それと共に、Proust 以後の文芸にみる内省的・追想的傾向が生命の創造的發展を欠くことを述べ、社会から切りはなされた個人の中に閉じこもっている点を指摘している。かの Gusdorf が *La découverte de soi* の中で Amiel や Proust につき述べているところ、聯関する意見である。

なお、個性の哲学的思索は、哲学的人間学との間に或る程度の聯関をもつであろう。むしろ、個性の問題を深く追求することにより、新しい生命をもつ哲学的人間学が成立しそうに思われる。また例えば、Marcel Deschoux の著 *Essai sur la personnalité* (1949) の如きは、この学と個性研究との中間に位する業績の一種であろう。然し、「哲学的人間学」を標題にもつ著書として優れたものはないようである。Michael Landmann の *Philosophische Anthropologie* (1955) は良くまとまった概論書であるが、個性の問題は特に扱っていない。

更に附記すれば、Leibniz の *substance individuelle* を新しい立場から「個性」の問題として扱う研究があつて良い筈である。既に Dilthey その他の哲学者も個性に関し *Monade* に比喻をとつている。また E. Cassiler は Leibniz の訳書 (*Philosophische Bibliothek*) に詳しい序論を記し、文化哲学として伸展させる示唆を述べている。然し、現代フランスの哲学書で個性の問題に因み *monade* に言及しているのは——私の知る限り——上記 Deschoux の *Essai sur la personnalité* ぐらいのように思われる。Notre être est foncièrement inassimilable à autrui, mais, à notre manière, nous assimilons des inassimilables, et donc, en quelque façon, nous sommes assimilés par d'autres. Chaque

personnalité est une monade inépuisable, qui par conséquent ne coïncide avec aucune autre, mais qui peut intégrer dans sa perspective d'autres monades, en nombre illimité, et qui peut tendre, par un effort de participation intuitive et sympathique, à recréer pour elle la perspective d'une autre (p. 267). Leibniz の Monadologie は、具体的存在の多様な世界につき、その形成原理として monade を説くように思われるが、論旨が断片的で錯交しているだけに、豊かな示唆を含むと云えるであろう。

## 8

芸術の世界には——云うまでもなく——無限の個性が存在する。芸術史を各自の芸術部門別に考察するにも、史的考察が詳細になるほど、個性的存在を多く扱うことになる。一人の芸術家の伝記すらも、内的追求が深くなるに従って、聯関する個性の数が増すのを普通とする。従って、芸術史学に於いても「典型の選択」が必要であるが、「芸術的個性」それ自体を思索の課題に求める場合は、基礎理論と併行して、諸芸術の世界に具体的事例を求めることとなる。一般理想としては「深く且つ広く」典型的個性をえらぶことが望ましい。一部門の芸術では芸術自体の性格が一定の限界をもつから、各種の芸術部門につき典型をえらぶこととなる。然し、何等の標準なく選出するのではない。また、通念で云うところの「天才」なるものを想定するでもない。個性研究の本質から考えれば、天才の概念は決して存在しないばかりでなく、むしろ排拒さるべきであろう。各自が無限の段階と様相とをもつて芸術の

理念を体現するのであるから、天才と云う如き「型」を肯定することは出来ない。事実上、天才なるものを規定しようとした試みで価値あるものは存在しないが、これは存在し得ないのが当然であろう。

そこで、個性研究の求める事例であるが、これを簡単に云えば、「対比」の鮮明さを示す一組の典型を求め、或はまた、芸術的個性の「特質」を明示する典型をえらぶことであろう。もとより、この種の選択法すら云わば「便法」にすぎず、標準のとりかただけでも限りないであろう。且つ、研究者「個人」自体の「深さと広さ」を限度とする上に、かかる研究を志す者自身は、同時に、それら多数の芸術的個性に関する専門研究者ではあり得ない。従って、優れた専門研究の「業績」を主要な参考資料として扱うことになるであろう。例えば、自叙伝・日記・書簡の如き「根本資料」すら、文字の背後に「人間」自体の複雑なコンプレクスを秘めるから、それらまでを洞察する優れた研究家の解釈なしに文意の「表面」のみをみるとき、「個性」の真実を誤認する結果に陥りやすい。そのほか、一定の芸術系統を扱った歴史的考察の中に個性を的確に組みこんだ業績も、同様に注目すべき参考資料である。

かくて、具体的に芸術関係の個性を考察する場合は、凡そ三部に大別し得るであろう。即ち、1. 対比的典型を「組」にして扱うこと、2. 各芸術部門の特質を明示する個別的典型を求めること、3. 一定の史的展開に於ける個性の系列を観ること、これである。但し、同一個性がこれら三種の観点から扱われるから、切りはなすことは単なる便法にすぎない。これらのうち「対比的典型」を扱う立場は、同一時代に共存する個性をえらぶわけであるが、研究上の事例としては特に適当であり、或る程度まで他の二種に共通す

る。

#### 示例 A

「対比」の最も性格的な一組は、Leonardo, Michelangelo, Tiziano を各主在都市の「個性」に 연관させるところに見出される。イタリア都市国家は各自独特の個性をもつが、Leonardo と Milano, Michelangelo と Firenze, Tiziano と Venezia——この関係が成立する。もとよりこの 연관は、3人各自の「个性的構造」の一部にすぎないが、「対比的典型」としての鮮明度が著しく、各自が異なる様相をもつて、「都市と個人」の二重性を構成する。

Milano は北伊の平原に位して外国列強の関心を特に惹く事情にあつた。Leonardo は美術の栄える Firenze を去つて Milano をえらんだが、当時この都市は強力な発展を示し、支配者は軍事に外交に、建設に享楽に、学問に芸術に、派手な活動と関心とをみせていた。かかる支配者こそ Leonardo の求める者であつたから、ここに生涯の成熟期を20年近く送つている。Milano は錯雑した世界事情の交叉点をなし、フランス国王の占領下におかれた期間をもつが、そのときにも巨匠は厚遇をうけている。然し結局この都市と運命を共にして国際人的転移の晩年を経験し、フランスに余生を終つている。而かも彼は、変化の多い全生涯を通じ、社会に即しながら社会を超越して、多面的な体験の間に独自の探究を伸展させた。全人的精神を発現したところに、美術家としての「特質」と「限界」とをもつ存在である。

Firenze は自由民権の共和国家として内部に政争が断えなかつたが、美術は活潑に伸展をつづけた。この都市国家にとり宿命的存在は Medici 家であるが、Michelangelo 自身の生涯にも宿命的な意味をもつ。

巨匠を美術家として育成したのも Medici 族であり、生涯を通じこの家族との関係がつづいている。祖国が自主制を失い Medici の支配下におかれてから、愛国者 Michelangelo は教会主都に定住して生涯を終り、建築史上の巨大な存在となつた。彼の美術に個有な特質の終局的発現である。

Venezia は海上に隔離して大陸の混乱をさけ、海上を通じ世界交通の要点に位している。形式上は共和国家であるが、少数貴族が実権を収めて内治を安定し、一切の対外方策を敏活的確に扱い、国力を拡充し経済に発展して、1,000年に及ぶ独立を保つた。Tiziano が出たのは、この港湾都市の発展が頂点をこえて下向線をたどりはじめる初期にあたり、大陸政策に関与した時代である。Tiziano は孤高の優位を保ちながら、悪徳批評の覇者と親交をつづけ、イタリア各地の支配者、外国列強の君主、ローマ教皇などの好遇をうけ、制作依頼を的確に扱つて社会性を高め、機会をとらえて金利を求めながら、百年に近い生命をめぐまれていた。そして、Venezia 特有の絵画を最高度に体现し、晩年に至るまで伸展をつづけて、その史的展開を個人の生涯に経験している。まことに Tiziano は Venezia 市の個性の縮図である。

もとより、ここに略記した課題を扱つている専門研究書はない。唯だ、第二次大戦後に、上記の典型的美術家自体を個別的に扱つている出版物中、私の注意を惹いたものだけにつき、以下に要点を略記する。

Leonardo da Vinci に就いては、かつての Seidlitz や Séailles の名著の如く、総合的に或は統一的にこの大精神を把握した新刊書を私は知らない。但し、専門研究家の業績でないに拘らず、「個性」の考察



に独自の示唆をみせているのは Marsel Brion の Léonard de Vinci (1951) である。この筆者は、様々の歴史的人物につき評論風の単行本を多く出しているが、Leonardo に関しては在来の専門研究に散見する「盲点」をつき、これを追求しているところ、注目に価する試みと云える。専門の研究者が不問に付している——実は重要な——問題を扱うにあたり、Leonardo の思考を史実によつて「構成」し、独自の解釈を展開させている。それゆえ、宗教的主題を表現した作品に対しても、単に「宗教画」として取扱わず、巨匠の「世界観」にもとづき理解しようとしている。また乗馬像に就いても「馬」の問題を追求して、美術史家より深度のある推察をしている。このほか、解剖学に聯関して男性の性器に関する Leonardo の手記に注目 (p. 346) し、性慾生活への考察を——或る程度まで——進めている。然し、この場合に著者は、Leonardo を「日常の人間」としてでなく「本質化した personnage」として扱ってしまうから、人間的矛盾を深く追求する域に達してはいない。かの GUSDORF が上記の名著で Eckermann の「構成」した Goethe を例にとり、的確に批判している言葉をここに聯想する (p. 246—8). *La dernière création de Goethe fut Goethe lui-même, tel qu'il voulait être et durer pour toujours dans le souvenir des générations à venir* (p. 247). 恐らく Leonardo は、Goethe の如き人間的矛盾をもつてまい。然し、GUSDORF の言葉はルネサンスの巨人にも適用することが出来よう。

Michelangelo に関しては、優れた専門研究家の新著が出ている。Charles de Tolnay の Michel-Ange (1951) である。この専門学者は以前から Mic-

helangelo の研究を発表し現在に及んでいるが、この書は、総括的に圧縮し要約した名著である。巨匠の生涯の精神的展開と作品の芸術的性格とに関する一切を含め、簡結明快に叙述しつくしている。Michelangelo の総合研究として最も完備していると共に、美術史上の個人研究として傑出した「要論」である。これに対し、評論家 Giovanni Papini の Michel-Ange (仏文 1949) は、これまで個性研究で扱われなかつた問題を、随筆風に述べた試みである。即ち、巨匠の生涯を通じ多少でも関係があつたと考えられる一切の人物を求め、Michelangelo との個人関係を考証し推察し、巨匠の生涯に組みこんでいる。もとより、個性の構造に於ける「個人関係」は、単なる「自と他」の関係ではなく、それ自体が「生命体験」であるから、GUSDORF も扱っている深い問題であるが、Papini はそこまで追求し得ない。然し、個性研究上の一課題としては注目に価する。

Tiziano と Venezia との関係は、Michelangelo 対 Firenze の如く外部的・記録的な鮮明度をもつわけではない。従つて、「美術家」としての生涯と業績とに限られた扱いかたが普通であろう。然し、Jean Babelon の小著 Titian (1950) は、上に述べたような「ヴェネツィアの性格」の一側面を主体とする試みと云える。この書は、巨匠の絵画が Venezia 特有の性格を最も個性的に体现している点を扱っていない。また Venezia 市自体に就いても述べていないが、「個性」の課題にふれているのでここに記しておく。

示例 B

文芸史上のクラシックとして最も特殊な個性的対比をなすのは、Goethe と Schiller とであろう。この二

人は「個性」自体の性格が著しく対比的であると共に、各自の個性の「構造」内に相互が深く組みこまれていく。生涯、性格、思想傾向はもとより、家庭の事情から芸術的特質まで、彼等は正反対なほどに異つていくのであるが、ワイマール侯国に共存していた時代には「美しき友情」に結ばれていた。この対比を個性研究の観点から扱うことは極めて興味深いであろう。また、近代フランスの文芸史上では、Flaubert と Maupassant との二人が、深い師弟関係による個人的な聯関をもちながら、「個性」としての対比を鮮かに示す場合である。Flaubert は二元的な世界像をもつようみえながら、資料の扱いから創作態度まで独自の精進に徹底し、高級な社交界にも参与しつつ孤高の静寂さを守り、傑出した少数の作品を完成している。これに対し Maupassant は、創作傾向に於いて一元的に徹しているが、悲惨に分裂した生涯の短期間に、多くの優れた作品を残している。二人の個性は著しく異なるが、共に「文芸家」の純粹な範例といえる。

この二人の文芸家につき、第二次大戦後に刊行された著書の中では、René Dumesnil の *Gustave Flaubert* (1947) と Pierre Borel の *Le vrai Maupassant* (1951) とが特に注目を要する。Dumesnil は、この文豪に関する数種の発表を既に行つており、Maupassant の評伝も書き、当代の文芸界をも扱っている。音楽や医学に関する著述もしている文筆家であるが、上記の *Gustave Flaubert* は、この文豪に関する総合的な業績として特に認められている。正しい意味の「伝記」であるが、作品の考察も的確・詳細である。もとより「研究」は「協感」に聯関し、Dilthey の云う *Nacherleben* にもとづく「理解」であるから、伝記の表現する「個性」は統

一した秩序に整理されることになる。この書は、この必然性に即した優秀な業績と考えられる。Borel の著書も協感の態度を示しているが、これは伝記ではない。Maupassant と親交のあつた人の追憶を直接に扱い、且つ、専門医家の詳細な研究をおさめ、これらの資料をもつて人間像を表現した著書である。特定の「個性」を制約する肉体的宿命は——例えば Lautrec の場合の如く——創造の上に積極的な意味をもつ。然し、この画家と「時代」を同じくする Maupassant の病症は、苛酷な「否定」としてしか現われない。しかも、創作活動と病的症状とが平行しながら伸展しているところ、悲惨の極みである。ここに Maupassant の「個性」の特殊性があるが、Borel の書はこの要点を良く扱っている。「自由」に生きることの深義に通じる課題である。

#### 示例 C

音楽史上に語られつつづけている「対比の典型」は Bach と Haendel とである。この二人は1685年にドイツの同じ地方で生をうけ、宗派も等しく、共にオルガンの名手であつたが、性格の傾向も生涯の経過も作品の特質も、正反対なほどに異つていく。少年期の家庭事情から歿後の社会関係まで著しく対比的であり、日常の生活態度から当代の歴史に組みこまれる様相まで著しく相異し、宗教音楽に於ける特質も極めて対比的である。且つ、65年に及ぶ共存の期間内に二人は一度も会つていないし、芸術上の影響関係も認められない。而かも個人の「有限性」を、各自の構造内で最高度に発現した典型である。然し、異なる意味に於いては、Haydn と Mozart、及び、Chopin と Liszt もまた、対比的典型の鮮明な二組である。

Haydn と Mozart とは親しい個人関係にあり、音

楽史上の影響関係も認められるのであるが、性格・生涯はもとより、同一時代の社会機構内に於ける「活きた」は全く対比的である。芸術的才能の発現する様相から社会的制約の受け方までが著しく異なる。また、Chopin と Liszt とは、1年の差をもつて生をうけ、共に郷土が小国であったから他国に移住する必然性をもつ。等しくピアノの名手として、当代の芸術精神を体現しながら社会に進出しているに拘らず、肉体的条件が芸術的性格に関係する様相も対比的であり、社会に於ける活きたも芸術感覚も著しく異なる。

音楽家の個性に関する研究は、楽論と技術との専門知識を特に前提する。私にはその資格が欠けているから、私の「個性」の貧しい限界内で評伝を理解するにすぎないが、第二次大戦後に刊行された著書の中では、Alfred Einstein の *Mozart, sein Charakter, sein Werk* (独文1953) に特別の敬意を感じている。音楽史家として傑出する著者の面目を良し示した業績と思われるが、研究としても模範的な示例の一つであろうと推察する。この著者は、根本資料によつて内面的に深く追求しながら、Mozart の人柄を冷徹に扱い、作品に就いて価値批判を的確に行っている。上に述べた「価値判断」の問題を実践しているところ、方法論の観点から特に注目を要する。また、Chopin に関し多くの著書を出した Edouard Ganche の *Frédéric Chopin* (新版1949) も「伝記」として甚だ綿密な業績と思われる。これに対し、H. E. Jacob の *Joseph Haydn* (1950) と Guy de Pourtalés の *La vie de Liszt* (新版1950) とは、単に「生涯」を叙した著書であるが、この二人を「典型」として扱う場合には、社会的な「対人関係」を特に注目する必要がある。かかる意味でこの二著を

附記しておく。

## 9

個別的な「典型」の選択は、個性研究者自体の「限界内」に於いて範囲を拡大し得るが、芸術的特質を体現する様相にもとづき、おのずから標準が定まるであろう。例えば、近代絵画史に於ける異色ある存在として、Cézanne と Gauguin と Lautrec との三人をえらぶとすれば、特異な個性の「構造」を見出すであろう。Cézanne は、彼の活きた時代に於ける孤独な存在であり、特異な性格が更に彼を社会から隔離することにより、その一貫した画境を追求しつづけ生涯を終っている。Gauguin は変転の著しい生涯の中に平安な生活をすてて美術家となり、異郷に住んで独自の画境を創造した。Lautrec は肉体的宿命によつて貴族社会からはなれ、レアリスムの時代精神を尖鋭に体現しながら、頹廢・卑俗の世界に人間性を発見している。この三人は、各自の様相に於いて「宿命的存在」でありながら、真の「自由」に生きて独自の「世界」を創造したのである。

以上三人の画家につき、注目すべき著書を略記する。既に戦前 Gerstle Mack の *La vie de Paul Cézanne* (英文原本1934、仏文改訂版1936) の如き、彼の異色ある個性を描出しているが、戦後には Bernard Dorival の *Cézanne* (独訳本1949) が芸術的特質を深く追求している。また戦前 Pola Gauguin の追想 *Mein Vater Paul Gauguin* (原本ノルウェー語、独訳1937) が出ているが、戦後には Charles Estienne の *Gauguin* (1953) により、史料に即して良く整理されている。更に同一叢書には Jacques

Lassaigue の Lautrec (1953) があり、極めて的確に彼の芸術的個性を叙べている。

優れた芸術的創造を「美しい生涯」のうちに一貫し透徹させた芸術家達もいる。近代から特に協感のもてる少数をえらび、性格の異なる芸術部門を代表させるとすれば、Claude Monet (絵画), Anton Pawlowitsch Tschecchow (文芸), Konstantin Sergeievitch Stanislavskii (演劇), Robert Maillart (橋梁) の4人を推挙する。いずれも、深い尊敬の念をもって間近かに追想される「個性的存在」である。

Monet の精進に貫かれた生涯は、ひとすじに伸展して美しくととのい、澄み切った画境を完成させている。A. Maurois は Aspects de la biographie の中で、音楽に於けるテーマの如きものを「伝記」に認め、Shelley を例にとつて Dans la vie de Shelley, le thème de l'eau domine toute la symphonie (p. 99) と述べているが、「水」をテーマとする点では Monet の方が更に本質的であろう。ここに、彼の生涯から芸術までを統一するテーマがあり、水辺を通じて巨匠の「個性」のパースペクティブをみることも可能なほどである。苦難と努力と創造と懷疑とを通し、美しく流れつづけた彼の生涯は、Boudin にみちびかれて「写実の精神」を知った青年期から、Clemenceau の友情に守られて大作を完成する晩年まで、「水辺」がつねに Monet の個性を形成しつづけたのである。但し、この優れた画家に関しては、彼の死後 (1929) に出版された簡結な小著 (Marthe de Fels の La vie de Claude Monet) 以後に、良く描かれた伝記の刊行をみない。

Tschecchow の生涯は、医師として並びに文芸家として、義務と努力との信念と実践に貫かれている。青

年期には貧しい生家のためにつくし、後年には病弱の身をもつてカラフトの視察旅行を敢てし、単篇と劇作とに傑出した創造を残している。而かも美しい人柄であつたと云う。現代の刊行書では、W. Jermilow の著した Tschecchow (独訳1951) が優れている。ソ聯にみる公式的な観念からではなく、この美しい個性を極めて深く追求しているのである。また Stanislavskii は、モスクウ芸術座の指導者として、長期にわたる優れた業績と、これに伴う演劇論の示唆ゆたかな名著とを残しているが、彼の訓練法は現代にまで影響しているらしい。W. Pudowkin は特筆すべき映画論 Die Arbeit des Schauspielers im Film und die Methode Stanislavskis (独訳1953) の中で、この点を強調しているのである。而かも Stanislavskii の自叙伝 Mein Leben in der Kunst (独訳1951) は、芸術家自体の追憶書として、特に傑出した大著である。なお、時代を同じくしてロシアに出た上記の文芸家と演劇家とは、舞台の世界で美しい友情に結ばれていたから、個性研究の典型として特に注目さるべき二人である。

Maillart は、橋梁と「自然」との関係が極めて重要なスイスにあつて、1901年から40年まで、工学技術の基礎の上に優れた造形性を創造しつづけた範例である。Hans Straub はその著 Die Geschichte der Bauingenieurkunst の中で、Was an Maillarts Bauwerken am auffälligsten in Erscheinung tritt, das ist ihre unabhängige, freie, „schöpferische Gestaltung“ ……と云う追憶文の一節を引用してのち、下の如く記している。Maillarts Bauten sind muster-gültige Beispiele des „technischen Stils“, Werke aus einem Guss, bei denen formale Gestaltung und statisch-konstruktive Durchbildung eine vollkom-

meine Einheit bilden (p. 260). この優れた橋梁設計家の詳しい伝記はないが、彼の業績をまとめた出版物 Max Bill 編 Robert Maillart (新版1955)により、その統一した生涯を理解することが出来る。

## 10

「個人対個人」の関係は芸術的個性の形成に重要な意味をもつ。上に述べた Goethe 対 Schiller, Haydn 対 Mozart, Tschchow 対 Stanislavskii にみる相互関係の如き、その美しい示例である。然し、個人関係一般につき云うならば、単に同一芸術部門内にみられるばかりでなく、全く異種的な芸術家の間にも成立する。Gusdorf は上記の著書中 L'influence の項でこれを扱い、Rodin 対 Rilke を示例のうちに加えている (p. 417) 但しこの二人の関係は、恐らく Gusdorf が考えているよりも複雑であり、まして、Flaubert 対 Maupassant の如く親しい師弟関係でもない。むしろ「異例」な場合と考えられるが、この課題を史実に即しながら詳述した著書がある。Ursula Emde の Rilke und Rodin (1949) である。老年期に入った彫刻家の使いなれた言葉 Il faut travailler, rien que travailler Et il faut avoir Patience をきき、自己に対し懐疑的になつている年若い Rilke は深い感銘をうけたらしく、C'est la grande renaissance de ma vie et de mon espoir que vous m'avez donnée. C'était hier dans le silence de votre jardin que je me suis trouvé moi-même (p. 11) と答えている。然し、この状態は二人の精神事情により著しく変化してゆく。且つ、当時の Rodin は性格的にも欠陥をもつていたらしく、彼に深い尊敬を感じている人すら、Le caract-

ère de Rodin commençait à changer et tournait au despotisme impatient dont les décisions tombaient comme le couperet sur les têtes innocentes et écartaient de lui consternés ses plus fervents amis (p. 16) と云っている。従つて Rilke も、後には離れながら交わりつづけたが、この詩人は Rodin の芸術につき、綿密な評論を書いているのである。

芸術の歴史は、史的展開の「一回性」と「必然性」をと把握し表現しながら、個性を組みこんでゆく。そして逆に、個性自体の「構造」の中に歴史が摂取されている。従つて、優れた芸術史は個性的存在を「活かして組みこむ」ことであり、逆に「個性」の研究は「歴史」を予定して成立する。Einstein の Mozart 研究が傑出しているのも、著者が優れた音楽史家であるによる。然し、一定期間の芸術思潮を主題とする歴史的考察に於いては、個性の存在性は更に鮮明となるであろう。もとより、芸術に関する「様式史」や「精神史」の如き試みは——豊かな史実を背後に予想する場合すら——一種の「史観」であり、Weber の云う Idealtypus にほかならない。また、L. v. Ranke の名著 Die Epochen der neueren Geschichte のように、長期間の史的展開を優れた「素描」として表現する技能は、この種の碩学にのみ可能なことであるが、芸術の歴史に成立し得るか否かは疑問である。それらを別として、ここでは、個性的存在を鮮明に組みこむ短期間の芸術史的把握を考えるにとどまるが、その性格的な範例も散見する。

第二次大戦後に刊行された一例は、Charles Beuchat の著 Histoire du naturalisme français 2vol. (1949) である。この書はフランス革命期から現代

までに於ける写實的系統の文芸家につき、時代と生涯と性格と作品とを「個性」の聯関として扱っているから、思潮の史的展開と共に、歴代作家の個性的特質を描出している。一般から云うと、特定の芸術的思潮をたどる芸術史では、著者の「觀念」が逆に史的展開を規定し、歴代の作家を一定の框にあてはめ、個性的特質を軽視し歪曲する弊が生じやすい。Weber が „Prokrustesbett” (上記) として適切に排斥している如き傾向である。これに対しこの書は、かかる欠陥を示すことなく、同一思潮が作家の「個性」により異なる「様相」をもつて体现される点を、極めて実証的に扱っているのである。

この文芸史に対し、方法論的に異なる観点を取りながら優れている別の一例を、美術史に求めるとすれば、Jean Leymarie の *L'impressionnisme* 2vol (1955) がある。極めて綿密に「年代記的時間」を考慮しつつ、個性的存在各自の特質を良く浮き出させ、画家相互の「個人関係」から生活事情まで描出し、各画家の芸術的特質を「対比」している。この画派を扱った数多くの著書の中で群をぬく優れた業

績である。且つこの書は、現代フランスの美術史界に見受ける欠点をもたない。例えば、B. Dorival の *Les étapes de la peintures française contemporaine* 3vol (1944) の如く注目されている著書も、「現代」に重点をおくため *impressionnisme* の扱いかたが極めて粗雑であり、解釈も甚だ浅いのである。これに反し Leymarie の著書は、この画派のもつ「歴史的一回性」を的確に把握する良書と云える。

× ×

以上をもつて本稿を終る。云わば、思索経過の「素描」である。従つて若し、複雑な内容を盛りながらこの主旨にもとづき、一定の著述にまとめるとすれば、構想も形式も更に異なるものとなるであろう。

これまで私はいくつかの機会に、この課題の一部を扱っているが、本稿では、それらの部分も修正し、全体の主旨に組みこんである。稿中に多くの著書を引用したのは、私の思索に様々の示唆を与えた文献を、併せて記しておくためである。

(1956年10月)